

「見えにくい性差別～見ようとしないと見えない問題～」

少子高齢化により働き手が不足している中、女性が活躍できる制度は進んできているものの、まだまだ性差別についての理解が進んでいるとは言い難い状況です。平成30年12月に世界経済フォーラムが発表した、各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数による日本の順位は、149か国中110位です。日本の男女共同参画は世界と比べて遅れているのに、この状況に関心を持つ人はあまりいないように感じています。

ある民間の調査（平成30年）では、人口の8.9%（11人に1人の割合）が、LGBT層に該当するという結果でした。これだけの割合なら、身近にもいると感じるはずですが、私は出会ったことがありません。おそらく「出会っていない」のではなく、「見えていない」、つまり気付こうとしていないのだと思います。

要因の一つに、「男はこう、女はこうだ」という社会的・文化的につくられたジェンダーがあるため、多様な性のあり方を見ようとしなことがあげられると思います。また、カミングアウトの問題があります。当事者が公表しても自分らしく生きる環境が整っていないため、カミングアウトできなったり、被害を受けても悪いのは自分のせいだと思い周囲に訴えないことがあり、見えにくくなっていると考えられます。これは、貧困、障害者、労働、外国人などの差別や社会問題でも同様のことが言えます。見えにくいこと自体が問題で、何でも見ようとしないと見えてこないのです。さらに、これらの問題は相互に絡み合っていたり、一人で複数の問題を抱えていたり、とても奥深いものです。

私も地域活動を通じ、さまざまな社会問題や多様な性のあり方について、もっと関心と気付きを持っていきたいと思っています。

※このコラムは、市と協働している男女平等推進事業企画・運営協力員が、日々の生活の中で感じている「男女平等」について執筆しています。

（次回は10月号に掲載します。）

問合せ/ それいゆぷらざ（女性センター） ☎463-2697

